
時の止められた島

西水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の止められた島

【Nコード】

N3326J

【作者名】

西水

【あらすじ】

凄まじい嵐によって、一つの客船が沈没した。それに乗っていた五人の高校生は、とある島に流れ着く。彼らのたどり着いたその島は、呪術によって時間の止められた場所だった……。奇怪な住民、彷徨う亡霊。異常な状況に恐怖しながら、彼らはそれぞれの物語をたどって行く。

01 沈没

凄まじい嵐が吹き荒れていた。

目を開けていることさえも難しいほどの強い雨が、目の前に降り注いでいる。水が強く全身を叩き、西村隼人にしむらひやとは鋭い痛みを感じていた。

（——皆、どこに行っただっ！？）

船の上には、救命ボートにありつこうと群がる乗客たちが居る。その人数は多く、彼は自分の友人たちを探し出すことが出来ない。

「くそっ」

彼は悪態をつきながら、再び走り始める。途中何度かすべって転びそうになりながらも、なんとかバランスを整えて走り続けた。

「隼人っ！？」

途端、彼に声がかけられた。

さかがみかえで

坂上楓が隼人を呼んだ。嵐で声が掻き消されないようにと、彼女は普段の様子からは想像付かないほどの大きな声を出していた。

「楓っ！」

「隼人、なにしてるの！？ もう皆先に救命ボートに乗っちゃったよっ」

「そうか。それは良かった！」

隼人はほっと肩をなでおろした。彼にとって、友人が無事に逃げているのかどうかはとても大切なことだった。彼はほっとため息をつくと、楓と共に走り出した。

嵐がいつそう強くなっている。

波は荒れ、彼らの乗っているこの大きな客船でさえ沈没しようとしている。

（こんなところに、あんな救命ボートで放り出されて大丈夫なのか？）

彼は一抹の不安を抱えながらも、救命ボートに乗り込んだ。隼人と楓は、気づかないうちに手を繋いでいた。絶対に離さないように、その手は二人とも硬く握り締めている。

二人の乗った救命ボートが、波の上におろされる。

波の上へのつた途端、ボートが大きく揺れた。荒波によって揺り動かされ、ジェットコースターのように方向感覚が狂わされる。二人を含むボートに乗ってる人々は悲鳴を上げるが、それは嵐に掻き消されてしまう。

そんな中、隼人は思う。

（みんな、大丈夫なのかっ！？）

彼は友人の安否を気にしながらも、その嵐の揺れに慣れることに努めた。

「水が入ってきてるぞっ！！」

一緒にのボートに乗っていた一人の男が叫ぶように言った。乗り合わせていた人たちは、その声に思わず飛び上がりそうになった。

波が高く、しぶきと共に大量の水がボートに入り込んできたのだ。それを見て、隼人は焦った。

「とにかく水をかき出せっ！」

男はそういいながら、手で水を外に弾くようにかき出し始める。皆もそれにならって水を外に出そうとするが、その努力の傍からすぐに、新たな水が流れ込んできていた。

隼人は目の前が真っ暗になっていくのを感じていた。

（このままじゃあ、絶対に海に放り出されるっ）

彼がそう心のそこで呟いたと同時に、彼の手を楓が握り締めた。

「大丈夫だよ。……きつと、大丈夫」

彼女の手は言葉とは裏腹に震えていた。顔は真っ青で、今にも卒倒しそうな様子だった。隼人はその様子に我に返る。

「——そうだな。信じなきゃ、何も出来ないよな」

隼人は再び、水を手ですくって出し始める。楓も同様に手で水を

すくいだす。しかしそんな隼人の決意も空しく、水はどんどん流れ込んできていた。足元が殆ど埋まってしまうほどにまで水が達し、人々は悲鳴を上げる。

「ダメだっ！ もう沈没するぞ！」

誰かが叫んだ。それと同時に、船はがくりと傾いた。そして傾いた箇所からどんどん沈んでいく。

「た、助けてくれっ」

誰かがそう叫んだ。

しかし、彼を助けることの出来る人は誰も居なかった。

その場に居た全員が、ボートから放り出されていたからだった。

ボートは既に波に飲み込まれ、足場としてさえ役立っていない。彼らは波に飲み込まれながら、散り散りになっていった。

（――楓っ）

隼人は近くにいた楓に手を伸ばした。手をとっても、こんな嵐の中では何の意味も無い。しかし、彼は無意識のうちにその行動をとっていた。

しかし彼の手は、何もつかむことは出来なかった。

——こうして客船は沈没し、隼人を含める乗客の殆どは行方不明になった。

02 島

太陽の光で白く輝いている砂浜。

それが西村隼人が目が覚めて初めて見た光景だった。

（……なんだ？）

彼はぼんやりとした頭で、なんとか起き上がる。そしてうつ伏せの状態から、胡坐をかいている状態に体勢を変えると、あたりを見回した。

（どこだここは？）

彼の目の前には砂浜が広がっており、その先には林がある。彼は鉛のように思い頭を動かし、なんとか現状を把握しようとする。

（——そうだ、船が沈没して。それから……）

救命ボートでさえも転覆した。その事実を思い出し、彼は思わず立ち上がった。

「皆は！？ 皆はどこだ！？」

隼人は叫ぶ。しかし、返事をする者は誰も居なかった。

彼の言葉は、穏やかな波の音に掻き消されてしまう。

彼は自分でも知らないうちに涙を流していた。

彼は自分と一緒に旅行に出かけた友人たちを思い出す。楽しみにしながら乗った船が、あのような事になるとは誰も想像していなかった。

隼人は嗚咽を堪えて涙を拭う。

（——俺だって生きてるんだ、皆もきつと生きてるはずだっ）

彼はそう信じようとした。自分以外はみんなあの後で救出され、既に家に帰っているのかも知れない。そう彼は考える。

（俺のところにも暫くしたら助けが来る。それまで、なんとかするんだ）

隼人は歩き出した。

冷たい風が吹きつける。風は彼の頬の上を静かに流れていく。

「——冷たい？」

彼は小さく呟く。

隼人はそこでようやく、全身が冷たく冷え切っていることに気がついた。全身の水で濡れている部分から、どんどん体温が奪われていつている。

隼人の奥歯が、寒さでがちがちと震えていた。

この寒さは、おかしい。

（……今は八月のはずだ。夏の盛りに、こんなに冷えるはずが無い）確かに場所によって太陽の当たり方は変わってくるため、気温の差はあつて当然だ。しかし、彼の感じている寒さは明らかにそんなものではなかった。

（何か、おかしいな）

全身を寒さで震わせながら、彼は頭を振った。隼人はそれについて考えることを止め、あてもなく歩き出した。とにかく彼には、寒さをしのぐ物が必要だった。

隼人は唐突に立ち止まった。

（——左目が）

彼は左目を押さえ、しゃがみこむ。

隼人の視界は揺れていた。見えているものがぼやけ、地震にあっているかのように、方向感覚が失われていく。

左目が激痛を発していた。左目をくりぬき、そこに熱した鉄のボールを入れたかのように、彼の左目は熱を持ち始めている。彼はその痛みと熱さを堪えながら、ただ痛みが過ぎ行くのを待っていた。

（また、なにか——何か、映るのかっ！？）

隼人の左目は、通常では見れないものを見ることが出来る。

それは心霊現象に含まれるような幽霊といった物から、過去に実

際にその場で起こったことや、未来に起こるであろうことなどである。

それらの映像は唐突に彼の左目に殺到し、彼の目に映像を焼き付けるのだ。

かつてその場で殺人が行われていたなら、殺人の映像が。これからその場で殺人が行われるとしても、同じく殺人の映像が映し出される。あるいは、殺された人の幽霊のようなものが見えることもあるだろう。

その左目の特殊な力は、隼人の力で制御することは出来ない。

未来を見たいと思っても、その時に見ることが出来るとは限らない。自分の見ている映像が、過去のものか未来のものが、あるいはそれ以外のものなのか判断することもできないのだ。

その左目の能力は唐突に発動し、唐突に終わる。

まるで偶然隼人の脳というアンテナが、そこにある電波を受け取ったかのように。暴力的にそれは訪れる。

彼はその左目が覚醒してみる映像を、『幻視』と呼んでいた。

そして、この時も隼人の左目は幻視を映し出そうとしている。

彼が居るのは林の中。砂浜から少し進んだところで、彼の目の前には人が舗装したらしき道がある。そこにたどり着いた途端、隼人の左目は激痛を発し始めたのだ。

（これはっ、いつもより酷いっ）

痛みを堪え始めてから十数秒。彼の左目は焦点を合わせ終わる。

隼人の目は、左だけ赤色に輝きだしている。右はまだ黒のままだ。

彼の視界は、今では二つに分かれている。右目で彼の居る現実を映し出し、左目で彼の居る現実とは異なる何かを映し出している。

彼は左目に覆わせていた手をどかし、目の前の光景を見た。

そこには、男の死体が転がっていた。

「——っ」

隼人は思わず叫びそうになった。その映像は、彼が今まで見て来たあらゆる幻視よりも、はっきりとしたものだったからだ。

彼は悪寒を堪えながら、男の死体を見る。

その死体は、うつ伏せに倒れている。服装は最近のものと違い、数十年前のファッションを思い出させるようなものだった。そしてその服ごと、男の胴体は何かに貫かれていた。男を貫いたであろう凶器は、既にそこには残っていない。ただ、おびただしい量の血を流し、倒れている死体があるだけだった。

血。

それは男の死体を包み込んでいるかのように見えた。土に染みこみ、地面が黒く変色している。

男の表情は恐怖に引きつり、目を見開いたまま死んでいた。口はだらしなく開き、そこには乾いた血がぱりぱりの状態でこべりついている。

「うつ——」

隼人は胃液が逆流するのを感じ、それを押し留めようとした。しかしその努力も空しく、彼は足元に吐瀉物を撒き散らす。

「はぁ、はぁ」

彼は肩で息をする。

今まで彼は、何度か幻視で人の死体を見たことはあった。しかし、それは一瞬のことで、白日夢のようなものだった。

——あまりにもリアルで、彼の脳はそれを理解することが出来なかった。

彼は地面に這い蹲り、男の死体を凝視し続ける。右目だけは現実を映し、そこには死体はおろか、血の一滴もこぼれていない。

あまりにもはっきり左目と右目がわかれているため、その負担は今までに彼が経験した比ではなかった。凄まじい頭痛が絶えず彼の脳みそをかき乱す。

何時終わるとも知れない暴力の渦へと、彼の意識は放り投げられ

る。

頭痛が治まってようやく、彼は左目が正常に戻ったことを知った。隼人は左目が元に戻ってから、数分の間動けないでいた。

日が傾きだし、あたりは一段と冷えてくる。夕日のオレンジの光が、彼の頬を照らしていた。

（……いったい、何だったんだ？）

彼は心の中で呟いた。

なぜこんなにはつきり映ったのか？　なぜ胸を貫かれた死体が転がっているのか？　今は過去の映像なのか？

その他もろもろの疑問が、彼の頭の中を渦巻き始める。それらを解決させる術を彼は持っていない。

彼は考えながら、再び道を歩き始めた。

隼人が道を進んでいくと、その道はやがて大きな通りになった。

そして小さな民家のようなものが、彼の前に現れてくる。民家の一つ一つは、どこか古臭い感じがした。家々は今食事の準備をしているのか、調理をする火が焚かれて煙が昇っている。

彼はその光景を見て、ほっと息をついた。

「良かった。ちゃんと人が住んでいたのか……」

舗装された道を見てもしやとは思っていたが、誰も居ないのではないか、という不安は拭いきれなかったのだ。日は既に沈み、彼は一人で野宿することを覚悟していたところだった。

（本当に良かった。人が住んでるってことは、船も来るってことじゃないか。そうすれば、何時になるか分からないが、帰ることは出来るはずだ）

彼は自分のその考えに一人喜んだ。そして、近くを歩いていた住民に声をかけた。

「あの、すみません」

住民は老人のようだった。腰が曲がり、歩くのも大変そうに見える。

る。老人は暫く隼人を見てから、言った。

「どちら様ですじゃ？」

「あの、俺。俺の乗っていた船が転覆しちゃったんです。それで気がついたらこの島に居て……」

隼人は自分がこれまで起こった事を説明した。当然のことながら、彼が見た幻視については伏せてある。あれは既に、彼にとつて忘れるべきことだった。

ただの幻視で終わらせておきたい。かわりたくない。彼はそう心の底でそう願っていた。

全ての話を聞き終わってから、老人は笑顔を浮かべた。隼人はその笑顔に、思わず微笑んだ。

「それは大変だったのう。どうじゃ？ 今晩はうちに泊まっていくかい？ ……この島は狭いからの、旅館はないんじゃない？」

「はい。ありがとうございます」

「船なら丁度明後日にこの島に着くことになっておる。荷物を運ぶための船じゃが、きっと助けになってくれるはずじゃ」

老人はそういつて、隼人を安心させた。

（——明後日、明後日になれば、俺は家に帰れるんだ）

彼はほっと一息つくと、今夜の寝床を確保するために老人について歩き出した。幻視を見てからずっと続いている左目の痛みも、ほとんど気にしなくなっていた。

島の夜は、ゆっくりと更けていく。

03 怪物

川尻奏は暗い森の中を歩いていく。
かわじりそう

太陽が沈んでから既に数時間が経過している。彼の目の前には、殆ど無明に近い闇が広がっていた。月明かりの、頼りない光を手がかりに彼は一歩ずつ慎重に歩いていく。

彼が一時間前に砂浜で目を覚ました時には、既に太陽は沈んでいた。彼は暫くそこで考えた後、あたりを探索することにしたのだ。た。

（この島、何か奇妙だ）

奏は声に出さずに呟いた。

彼が疑問に思っているのは、この島のようすについてだ。彼があたりを探索し、森の中に足を踏み入れてからまだ少ししか経っていないが、彼は生き物の姿を見ていなかった。

彼は近くに立っている木に、手をあてた。その表面はざらざらで力強く、木の太さも充分だった。

（こんなに立派な木がある森なんだ。生き物が見当たらないのは何でだろう？）

彼はさらに奥へと向かった。

無音。

奏はこの島をその言葉で表すことが出来る。

彼がこの島で目を覚ましてから、彼が聞いた音と言え、波と風と木々の揺れる音だけだった。生き物の鳴き声や、鳥の羽ばたく音も聞こえない。

まるで、時間が止まっているかのように、音がしなかった。

無音で、それでいて真つ暗な中に居ると、彼はだんだんと心細くなってきた。砂浜で朝まで待って、それから探索を始めたほうが良かったかも知れない。

しかし、この寒い気候の中待つていたら、風邪をひいてしまう。仮にここが無人島だったとしたら、風邪を引いた状態で生きていくのは随分と難しいだろう。そのため、風邪を引くよりもはやく、何かで暖をとる必要があった。

（丁度良い感じの洞穴とか、無いのかな？）

奏はさらに歩く。

闇の中は無音で、そこに彼の知らない化物が姿を潜めている場面を想像した。それはきつと狼のような風貌で、それでいて物音一つ立てずに潜伏するだけの知能がある生物だ。

彼は全身に鳥肌がたつのを感じた。

（やっぱり、戻ったほうが良いかもしれない……）

奏がそう思い、戻ろうとした時だった。

彼の目の前に、大きな建物の屋根が見えた。それは瓦屋根の一部が月明かりに照らされたものだったが、彼はそれを見て心の底から勇気が湧きあがってくるような気がした。

「やったっ！ 家だ！」

彼は思わず声を上げていた。そして、ちゃんと見ようと彼は足を速める。

やがて木々を抜け、彼はその建物を目の当たりにした。

それはとても大きな建物だった。時代劇にでてくるような武家屋敷のような、それだけの大きさと威厳を感じることが出来た。

築何十年と経っていそうな、神秘的で、それでいてどこか威圧的な建物だった。

（これは……、すごい）

奏は感嘆のため息をついた。

誰がここに住んでいるのかは分からない。あるいは、この島では神社のようなものかもしれない。ただ、誰かがこの島に住んでいるという事は、建物がちゃんと整備されていることから確認できた。

彼は暫くその建物の周りを巡回し、それから建物から続いている道のようなものをたどることにした。そこをたどっていけば、民家

があつて人が居るに違いないと思つたからだ。

彼は道を歩く。

月は真上にあがり、彼の頭上から照らし続けている。風が吹き、彼は目を細める。

それはまるで、怪談に出てくる一場面のようなだった。静かで、神秘的で、恐ろしい怪談を思い出す。こういった場面では、何時だつて怪物が出てくるんだ。

彼は自分の肩が震えているのを感じていた。

（恐がるなよ。僕は小学生じゃないんだから）

彼はそう思い、自分を叱咤する。しかし、彼の感覚はさらに研ぎ澄まされていった。そして、何かの気配のようなものを感じ、彼は右の林を見る。

奏は普通の人と同じく、人の気配を感じるのに慣れているわけではない。そのため、彼はその気配を気のせいだと考えることが出来る。しかし、彼はそうしなかった。

（——何か、いる）

奏はそちらを凝視し続ける。

彼の心臓は既に早鐘のように素早く打ちつけている。全身からは汗が噴出し、頭が真っ白になってくる。

彼の嫌な予感がピークに達した時、それは唐突に林から姿を見せた。

それは、怪物としか表現出来ないものだった。

林から出てきたその怪物は、後ろから見たらただの人間に見えただろう。普通に人間の服を着て、人間のように手足があり、人間のように頭がある。

しかし、一つだけ足りないものがあつた。

普通の人間なら必ずある物、それがその怪物にはなかった。

（――目が、無いっ）

人型をしたその怪物には、人間にはあるはずの目が存在していなかった。

失明した人間というわけでもない。怪物には目があつた痕跡すら残していなかったのだ。最初から目がないように作られているように。人間では目のあるはずの場所は、ただの肌色の皮膚が続いていた。

「――っ」

奏は喉がつまり、悲鳴を上げることさえ出来なかった。

目の前の物を認識することが出来ない。彼の常識の範囲を超えた現象に、彼の頭は真っ白になっていた。

（に、逃げなきゃっ！！）

奏は一目散に走り出した。走る方向は、先ほどから向かっている方向だ。集落がありそうな方向へと、彼は走っていく。

誰か普通の人間と会いたかったのだ。

通常の世界に住む人間と会い、自分は現実に居ると確信したかった。怪物に会ったという出来事をそれで掻き消したかった。

彼は息さえせずに、道を駆ける。

途中何度か足を躓かせたが、彼は後ろを振り返ることさえせずに立ち上がって走り続けた。

奏は見えてきた村の手前で足を止めた。

彼のはるか後ろには、怪物が後を追ってきていた。しかしその速度は遅く、彼はそれに気づいていない。しかし、既に彼にとってそれはどうでもいい事柄になっていた。

「――これは、何っ？」

彼は泣きそうな声で呟いた。彼の目は、前の光景に釘付けにされ

ている。

彼の目の前、そこには、大量の怪物たちが居た。当たり前のように、民家の間を徘徊している。まるで外国の映画に出てくるゾンビのようだ、と彼は頭の隅で思った。

彼の頭がしびれ何も考えられなくなっている間に、その怪物たちは奏に気づく。あるはずのない目が、彼の全身をなめまわすように見ていた。

奏は動けない。

怪物たちは、よろよろと彼に近づく。足腰を怪我した老人のような足取りだが、その怪物たちの見た目はいたって健康だった。怪我一つなく、老人であるわけでもない。若者や、子供もまじっていた。目が無い人間たちに、奏はただ恐怖する。

怪物たちは近寄る。彼らは躊躇い無く動き、彼の目の前に迫った。

途端――。

「おい奏っ！ 何してんだっ」

誰かが彼の名前を呼ぶ声がした。

その聞き覚えのある声に、彼は思わずそちらに顔を向ける。それと同時に、彼の身体は誰かに抱えあげられた。

「えっ」

「さっさと逃げろっ」

「は、隼人君っ！？」

そこには、彼の頼りにしていた友人の姿があった。

04 地下室

走る。

走る。

走る。

息をすることさえ忘れて二人は走る。

後ろを振り返ることさえも出来なかった。月明かりの照らす道を、ひたすらに彼らは走り続ける。

全身が汗をかいていた。心臓が高速で鳴り、全身の血が滾っている。それでいながら、彼らの身体の節々はまるで雪山にいるかのようには震えていた。

恐怖が彼らを突き動かす。

「奏っ！ お前さつきこつちから来たよなっ！？ こつちに何か隠れられそうなどとはあるか？」

西村隼人は隣を走る川尻奏に叫んだ。声の節々が震えていたが、彼はそれを押し切って大きな声で怒鳴った。

奏は目に涙を浮かべながら答える。

「な、なんか、大きな屋敷のようなものがっ——」

「それだっ」

大きな屋敷なら、きつと隠れることの出来る場所があるうだろう。それに、屋内なら部屋に鍵をかけて籠城することも可能だった。

二人の後ろには、目の無い人型をした怪物たちが迫ってきている。彼らはまるで血に飢えた獣のように、ただひたすらに二人を目指している。彼らは走っても殆ど速度は無いが、間違いなく二人の通った道を辿ってきていた。

二人は屋敷のような建物に到着すると、正面に開かれた大きな扉を開けようとする。

隼人が思い切り扉を引っ張ると、鍵などかかっていたかのようにあっさりと開いた。

玄関の先には闇が続いている。どこか古い昔ながらの畳の匂いが鼻腔を刺激した。その闇に僅かに恐怖を感じるも、それよりも後ろから迫ってきている怪物たちの方が恐かった。

隼人は玄関の扉を閉める。

そしておもむろにあたりの物を散らかし始める。近くの下駄箱をあさり、その際に物がばら撒かれる。

彼はひたすら手探りで探す。

（これが下駄箱なら、あるはずだっ）

彼はやがて、目当ての物を手に入れる。それは懐中電灯だった。

彼がスイッチを入れると、それは明るい一筋の光を作り出す。

「下駄箱のそっち持て」

「う、うん」

二人は下駄箱を動かし、玄関に立てかける。少しでも怪物の進行を抑えるためのバリケードの役割を果たしてもらったためだった。

がたんと大きな音がして、即興のバリケードは作られる。しかしぱつと見ても隙間が大きく、とてもそれではまともに防げそうもなかった。

「は、隼人君。この後どうするの……？」

奏の声には恐怖の色が含まれていた。

「隠れるか、何か対策を考えるっ」

土足で上ることに抵抗があつたが、靴を脱いでもいらなかった。奏は恐れながらも隼人に続いていく。二人の心臓は、長距離走を終えた時のように激しく打ち付けている。

隼人が数歩進み、奥の闇をライトで照らした途端だった。

彼の左目が、熱を持ち始めた。

彼の左目が、違う次元の物を映し出し始める。

「うつ……」

彼は思わずうめき声をあげた。それに対して奏は駆け寄り何かを叫んだが、隼人はそれを聞き取ることが出来なかった。

彼は奥の廊下に目を凝らす。

左の視界はノイズが入ったようにぼやけている。無理やりに違う場所に焦点を当てているのだから、それは当然のことだった。

彼の前に、一人の少女が居た。

長く、艶のある黒い髪。それに、彼は思わず声を上げていた。その少女は、彼のよく知っている人にとっても似ていたからだった。

彼の知り合いに、とても良く似ていたのだ。

（これは――）

そんな隼人の戸惑いも気にせず、その少女はゆっくりと奥へと歩き始める。その足取りは重く、彼女が躊躇っているように思えた。迷いながらも少女は先に進む。

（……行かないと）

奏が彼に何かを言った。しかし、隼人には聞こえない。彼の耳は既に、現実から切り離されていた。彼が見て、感じているのは目の前にいる少女だけだった。

隼人は少女を追うため、闇へと足を踏み出した。

隼人と奏は、懐中電灯の明かりを頼りに先に進む。

隼人は左目を見開き、前を歩く少女を凝視し続ける。

彼にはまだ、少女が自分の知っている彼女であることを信じることが出来なかった。

――少女は坂上楓だった。

隼人と奏を含むグループの一人の、坂上楓だった。

彼女が居るということをどう受け止めたら良いのか隼人には分か

らなかった。彼女がここに何らかの形で立ち寄ったという事は、彼女は今も生きているという証になる。しかし同時に、この島に居るという事は怪物に遭遇することもあったはずなのだ。

つまり、彼女は怪物に襲われる可能性——襲われた可能性があるということになる。

（もし、もしこれが、過去の映像でも未来の映像でも無かったら……）

そうだとしたら、彼女は既に幽霊になって彼の前を歩いているという解釈しか出来ない。彼はそれだけは、どうしても信じたくなかった。

そうだとしても疑問は残る。……なぜ彼女が一人で、この屋敷を訪れたのかということだった。

隼人は楓のような少女を追いかける、奏はその後を不審そうに付いていった。

やがて彼らは、一つの部屋にたどり着いた。

その部屋は他の部屋と変わりなく、畳のあるただの和室のようだった。楓はその部屋に入ると、部屋の隅に行った。そして、そこで床にしゃがみこみ、何かを探りはじめる。

隼人はそれを、ただ見ていた。

やがて彼女はそこから何かを取り出すと、部屋の逆側へと向かった。そして彼女は、再び地面にしゃがみこんだ。再び何かを探し始める。

（何だ……？）

彼女は畳のふちに指をひっかけると、それをゆつくりとスライドさせた。

「っ！」

隼人は思わず声をあげそうになった。

畳というのがスライドしていくのを、彼は始めてみたからだった。中に何かを隠している様子で、畳が直ぐに動かせるようにしておいたらしい。

そしてその畳の下に、丸いマンホールが現れる。

しかし、それはマンホールではなかった。それはこの屋敷の下に繋がる、地下への入口だったのだ。

楓のような少女はそこに先ほど拾った何かをはめ込む、そして取っ手を持つて思い切り上に持ち上げた。そして彼女はその何か——入口の鍵を元の位置に戻すと、自らを地下への入口へ滑り込ませた。やがて、蓋が閉まり、内側から鍵がかけられる。

彼の左目は、そこで通常の視点に切り替わった。

「隼人君っ！」

すぐ近くで聞こえた声に、彼は驚いた。

「……悪い。ちょっとぼうつとしてた」

「で、ここからどうするの？」

奏はその和室を見回した。隼人が左目で見ていた光景を、彼は共有していなかったのだからそれは当然の反応だった。闇雲に歩き出した隼人について、奏は心配している。

「——地下があるらしい。だから、地下に行くぞ」

「えっ？」

奏が驚きの声を上げた。隼人はそれを無視すると、部屋の隅へと向かった。そしてしゃがみこんで、巧妙に隠してある鍵を手取る。「くわしい話は後だ」

隼人はその鍵を使って、地下への入口を開けた。

地下にはいくつかの部屋があつた。

それは単純な造りになっており、一本の通路に部屋がいくつか連なっている。通路の左右に扉があるその様子は、まるで牢獄のようだった。

「ここは……」

奏は震える声で言った。

隼人は何も答えない。答えることは何もなかった。彼自身、この地下にあるものが何なのかさっぱり分からないからだ。

二人は懐中電灯の明かりを頼りに前に進む。

どこからか、焼けた線香の匂いが漂ってくる。たった今まで誰かがここで線香をたいていたのだろうか。しかし、光で照らしても人影は全く見えなかった。

（楓……）

隼人は先ほどみた彼女を思い出す。

彼女はなんでこんなところに入ったのだろうか。まるで以前入ったことがあるかのように、彼女はあっさり鍵を見つけて中に入った。それが気がかりだった。

以前来たことがあるのだとしたら、それは何のためなのか。

隼人は考えたが、答えは見つからなかった。

二人は通路を歩く。近くにあった扉を開くと、そこには大量の書物が保管されていた。

「なんだ？」

「よく分からないけれど、何かの専門書じゃないかな」

奏は本を手にとって眺める。表紙の文字は既にかすれ、読み取ることは出来ない。彼はそれを懐中電灯の傍で開いた。

「なんだ、こりゃあ」

隼人は中を見て思わず呟いた。

そこには、彼には分からない文字で埋め尽くされていた。奏はそれを中国語ではないかと思った。

漢字がひたすら並べられているその本は、到底日本で書かれたものとは思えない。

「中国語だけど……、何か妙だ」

奏は更に頁をめくった。紙がこすれる音がする。

奏はあるページで手を止めた。彼が開いているそのページには、円が描かれている。それもただの円ではなく、円というよりも多角

形のようだった。複雑で細かい模様がついている。その図形のいたるところに、小さな文字で文章が書かれていた。

「これは……、ゲームとかで良く見る魔法陣って奴じゃないか？」

隼人が言った。

「そう、だね」

「なんだこりゃあ、中国語で魔法ってのを研究してたことがあるのか？」

隼人はバカにするように言った。

魔法というのはあくまでファンタジーの世界の話なのだ。現実世界でそのようなことが行われているなど、彼には考えることが出来なかった。

しかし、すぐに彼は思い出す。

二人は先ほどまで怪物に追いかけられて来たのだ。

地下に入り鉄の入口を閉めて安心していたが、今思い返せばとても現実とは思えない事態だった。目が無く、ひたすら迫ってくる怪物達。それらは魔法などの非現実と強く結びついていた。

（それに――）

彼自身、非現実的な力を持っているではないか。

現実とは違う物を見ることの出来る左目を、持っているではないか。

それで見えた未来や過去、そして幽霊などの物の存在を知らながら、魔法などのことは否定するのか。それを思うと、隼人は複雑な気分になった。

暫く図を見ていた奏は、顔をあげた。

「これはたぶん、風水が何かの解説をしているのだと思うよ」

「何？」

「方角や色、地形。そういったものを重要視してかかれているみたいなんだ。だから、たぶん風水の事だと思う」

「へえ」

隼人は感心して呟いた。

彼らはその部屋を出て、向かい側の部屋に行った。そこには前の部屋と同じように、多くの本が置かれていた。

床に落ちていた本を手に取ったが、やはり外国の言語で書かれて
いるらしく、読み取ることが出来なかった。

二人は他にもいくつか部屋を調べたが、そのうち殆どが本の保管
場所に使われていた。

「どうなつてんだここは？」

「分からない。大きな書齋みたいなものじゃないかな」

二人は奥へと進んでいく。

やがて闇の中に、小さな光が漏れているのが見えた。そこに行く
と、そこは大きな部屋になっていた。その部屋はまるで体育館のよ
うに何も置かれておらず、二人の入った反対側には大きな鉄の扉が
閉じられていた。

光はその部屋の上の隅から入ってきているようだった。

天井近くには格子状の通風孔があった。そこは直接外に出ていて、
月の光が差し込んできているのだった。

大きな鉄の扉は閉まっており、鍵はどこにもなかった。

左目が何かを写すことを期待したが、それは起こらなかった。使
いたい時に使えず、使いたくない時にも発動してしまう。それが彼
の左目の欠点といえるものだ。

「ねえ……」

二人は床に座り込んでいた。壁に背を預け、並んで座っている。

二人は書齋の一つに毛布が落ちていているのを見て、寒さをしのぐため
に持ってきていた。

「なんだ？」

隼人は格子越しに月を見ながら言った。

「……あのさ、さつきから気になってたんだけど。なんで地下があるって分かったの？」

奏は恐る恐る言った。

その声には恐怖の色が含まれているようだった。聞いてはいけないことを聞いているのかもしれない、そう彼は思っているのだろう。隼人は大きくため息をついた。

「——じゃあ、お前にだけは話す。あまり人に言つなよ」

彼は説明を始めた。

それを今まで人に説明したことは殆ど無かった。今まで一人を除いて誰にも言わなかったその隠し事を、友達に話している。それはどこか不思議な気分だった。

隼人が言う言葉を、奏は熱心に聞いていた。

本当のところ、彼にとつて地下があることがどうして分かったかなどということはどうでも良かった。ただ黙りこくって座っているのが嫌で、とても心細くて、話の話題を探したのだ。

背中が壁に触れているため、そこからどんどん体温が奪われていくような気がした。

全身が冷え切っていき、やがて自分の身体をまともに動かせなくなることを想像する。それは恐かった。闇の中に一人取り残されるような恐怖が、そこにはあった。

隼人の説明する彼の左目の話は、奏にはとても信じることの出来ないものだった。

しかしそんな突拍子も無い話だからこそ、信じることしか出来ないと思う。わざわざつまらない冗談を言う場面じゃないのだ。

それにきつと、この話は信じなければならない。

——彼だつてきつと、信じてもらえないかもしれないと思っっているはずなのだ。

だからこそ、否定されることを覚悟で説明をする彼の言葉を信じ

なければならぬ。そう思う。それこそが本当の友達と呼べるものではないだろうか。

—— 本当の、友達。

奏は心の中に出てきたその言葉に、思わず息を呑んでいた。

それは彼がずっと手に入れようともがいてきた目標であり、それでいて、希望だった。闇の中でさえも、なんとも無いように輝き続ける光こそが友達だと思っていた。

…… 全てを包み込むようなその絆は、彼にとって宝物だった。

05 友達

川尻奏は気の弱い子供だった。

誰かに強く責められても、何かを言い返すことは出来ない。理不尽な目にあっても、それを仕返すことが出来ない。

何か行動を起して、それを失敗するのが恐かった。

そういう子供だったから、虐められるようになったのも無理はないのかもしれない。

最初は比較的軽い虐めだった。

暴力や陰口などとは違う、ただひたすら無視されたのだ。

彼が話しかけても、それに対して返事をしない。返事をしてはならない。そういった考えが、いつの間にか彼の学級に浸透していた。誰かが彼を陥れようとしてやったわけではない。

ただ彼は必然的に、誰かから無視されるようになっていったのだ。

「君は、いつも一人でいるね」

クラスの妙な空気を気にかけて先生は彼にそう言った。

「なんで一人でいるの？」

その質問は明らかに間違っていたのだ。

奏は自ら一人になりたかったわけではない。誰もそんなことを望んでいないのに、それなのに彼はひとりぼっちになっているのだ。

それを先生は知らずに、無責任な言葉を彼に投げかける。

「友達の良いものだよ」

奏は膝の上で拳をぎゅっと強く握った。

「友達を作りなさい」

担任はそういうことが使命であったかのようにそう告げると、彼の前から去って行った。

夕日で照らされた教室に、彼は一人佇んでいた。

友達を作ろう。

そう決意しても、彼はそれを作ることが出来ない。

もともと内気で、何か行動する勇気が無い子供だったことに加え、周りの環境でさえもそれをさせまいとしていたのだからしょうがない。

彼はずっと一人ぼっちだった。

奏が中学校に上がり、学年の半分以上は他の小学校からの生徒に変わった。

この時、彼には友達を作る機会が確かに存在した。

しかし既に彼には、人に話しかける勇気というものが無くなっていた。話しかけても、話しかけても相手にされない。その恐怖が、より一層彼の心を闇の中に閉ざしていたのだ。

無視されるのが恐い。

——だから彼は、自分から人を無視することにした。

誰かに話しかけられて、友達を作ることなんて出来ない。誰かと仲良くなるなんて無理なんだ。だからこそ、その希望を持つことさえしなかった。

孤独。

たった一人。

学校には五百人ほどの多くの生徒が勉強に励んでいる。それだけ沢山の人間に囲まれながらも、彼だけはたった一人で生活している。誰にも関わらず、誰にも関わらず、彼は生きていた。

誰とも関わらなければ、どこにも行けないと知っているのに。一人では何も変わらないと知っているのに。それでも彼は、一人で居

ることしか出来なかった。

そんな闇の中、彼はそれでも光を求め続けた。
親友というものを、求め続けた。

それは高校の入学式だった。

温かい日差しが照らしつける中、奏はよろよろと歩いていた。彼の手には大きな紙袋が抱えられていた。その中は沢山の教科書や辞書が入っている。それらは彼が入学した高校は新学校だと教えていた。

その量は半端な物ではなかった。

十冊や二十冊ではない。本の重さがこれほどのものとは彼は知らなかった。全身を使って抱え込み、必死に歩く。

しかし元々運動が苦手な彼にとつて、それは長くは続かなかった。手から紙袋がこぼれ落ち、道に教科書をばら撒いてしまう。同じように袋を抱えながらも悠々と通り過ぎていく生徒達が、声を上げて彼を笑った。

彼は思わず泣きなくなった。

それでもなんとか教科書を拾おうと手を伸ばした時だった。

「おいおい、大丈夫かよ」

頭上から聞こえたその声に、奏は上を見上げた。

しかし既に彼はそこにはおらず、視線を戻すと彼の前で一人の少年がしゃがみこんでいた。教科書を集め、紙袋の中に戻している。

「お前、一人なのか？」

問いかける少年に、奏は返事が出来なかった。

「お前の親は何してるんだよ。どうせ俺の親と同じで話しこんでるんだろ？ …… 楓が俺と同じ高校に入ったからって、まったくー。ほらよ。持てるか？」

少年は笑いながら彼に紙袋を渡した。その中にはこぼした教科書が収められていた。彼がぼんやりしていた間に、少年は全て拾い集めていたのだ。

奏は持ち上げようとすると、腕に予想以上の負荷がかかっていたのか、腕が痺れてうまく持てなかった。

少年は再び笑った。

「鍛え方が足りないぜ。男ならこれくらいさくつと持てよ」

彼は笑う。

その笑いは、奏が今まで聞いてきた物と違っていた。失敗した人に向ける笑い声とその笑い方は、似ても似つかないものだった。

……人をバカにしている笑いでは、なかったのだ。

おろおろしている奏を見て、少年は呆れたようにため息をついた。少年は奏の紙袋を手にとると、自分のそれと一緒に抱えた。

「家、どこだよ？ 近くだったらそこまで持ってってやるよ」

その時彼は、自分が今まで抱え込んできた物は、とてもちっぽけな物だということを思い知った。

それから彼には友達が出来た。

その時の少年である西村隼人のたつへいに、彼の幼馴染であるという坂上楓、そして 野田洋平のたきようと 野田京子という兄妹の四人の友達だった。

それらの友達が出来たのは隼人と出会ったお陰だと彼は思っている。

隼人が自分の闇を取り払ってくれた。

きっと彼に出会わなかったら、闇に飲み込まれていたに違いない。

そう思っていたからだろう。

まるで命の恩人のように隼人を思っていたからだろう。

奏がその一瞬の間に彼を突き飛ばし、守ろうとしたのは彼の頭が考えてやったことではなかった。ただ勝手に身体が動いた。恐がりの彼の精神も、それに逆らうことは出来なかったのだ。

彼は親友を守った。

——彼の心の中にある光を、守った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3326j/>

時の止められた島

2010年10月21日23時39分発行